

交通遺児作文集

あしながおじさん 物語

交通遺児育英会
専務理事

玉井義臣編



「あしながおじさん」を募集しています！
この本の印税収益は、育英資金にあてられます。

サイマル出版会

交通遺児作文集⑤

あしながおじさん 物語

交通遺児育英会 専務理事 玉井義臣編



各国語で書かれた
「あしながおじさん」

サイマル出版会のめざすもの

*サイマル出版会は、激動する現代史の創造に読者とともに参加する姿勢で、国際的言論活動を展開するべく出発した。

*思えば、人類は平和のために戦争を続け、世界は一つであることを願いながら分裂し続けてきた。科学の発展は、電子情報時代をもたらしたが、情報の同時性はまた単純同一反応性をも生み、新たな誤解に苦悩する結果となっている。

*われわれは、こうした新たな誤解による相剋の根をとり除くために、また世界の指導国家として再登場した日本の国際的資質を豊かにし、国内の諸課題を鋭角的にとらえ、国際間の理解を深めるための現実的歴史的素材を提供しようと志すものである。そして地球上のコミュニケーションを円滑にすることによって、人間の条件を回復し、世界が平和に一つに運営統合される事業に、言論活動によって寄与しようと念願するものである。

*このささやかながらも高き理想に精進せんとするわれわれに、幸いにして読者諸賢のご支援を期待してやまない。

(編者紹介)

玉井 義臣
たまい よしおみ

交通遺児育英会専務理事、心塾塾長。——1935年大阪府に生れ、58年滋賀大学経済学部を卒業。経済評論家として活躍中、64年に母を交通事故で失ってから交通事故問題に取り組み、以来、交通評論家、実践者として数々の先駆的キャンペーンを展開してきた。

著者に『交通犠牲者』『示談』『ゆっくり歩こう日本』(サイマル出版会)、編書に『天国にいたもうさま』『母さん、がんばろうね』『こんな本だいきらい』『明日があるから生きるんだ』『母が泣いた日』『あしながおじさんへの手紙』『災害がにくい』(以上サイマル出版会)がある。

連絡先・〒100 東京都千代田区永田町 1-11-28

交通遺児育英会(電話) 03-3581-2271

出合いが道を拓く——編者まえがき

この春、K君とM子さんが結婚する。

Kは秋田の大地主の息子で、宇都宮大学で農業土木を学び、いま交通遺児育英会の学生寮「心塾」で塾生の指導に当たっている。三一歳。M子は大阪生まれで、四月から都立高校で英語を教えることになっている。神戸外大四年の二三歳。

二人が「出会った」のは、Kが大学一年のときだから、M子は一〇歳。Kは交通遺児を励ます会に入り、小学三年の遺児M子ちゃんの詩に感動し、活動に熱中する。

「このせまい国に、多すぎる車。どこを歩くにも頭から、車、くるまとはなれない。

朝、学校へ行く時、決って母の声が追ってくる。『車に気いつけや』かならず三回は同じこと

を言う。わたしも『わかってる』と三回は答える。そして『お母さんも、氣いつけや』と言う。母も『わかってる』と答える。これが、わが家のしんけんな行つて来ますのあいさつだ。

広い道路もなく、わたしたちが通るところを車が通る。もし自動車会社の、社長さんの大事な子どもさんが、わたしのやさしかったおとうさんのように追いつかれ、ひきころされたら、もう車なんか作るのいやになってくれるんじゃないかな。あんなにテレビで、かつこいいとかこえてるとか言つて、はでにせんでんしたくなくなるのじゃないかな。もしそり大じんのまごが、学校へ行くと、中、ダンブがつつこんでくる様な目に会ったら、歩道橋をつくることを、もっとしんけんに考えてくれるのじゃないかな。

こんな人にをころしてまで、たくさん車がくるんやろか。車が少なくなるかわりに国がびんぼうになり、わたしの家もびんぼうになつても、おとうさんが生きている方が、ずっといい。なくなつてしまえ、車なんか」

（玉井編『母さん、がんばろうね』交通遺児作文集②、サイマル出版会）

このM子の詩は、この一八年間に延べ何万人かの交通遺児が作文を書いたなかで、私には最も印象深い三点のうちに入るものだ。一九七二年、スウェーデンで開催された、国連の第一回世界環境会議で世界に紹介された。

KとM子が本当に出会ふのは、M子が大学一年、全国の大学生が全員つどう合宿研修の時だった。先生と学生の間柄だから、とくに話を交わすこともなかった。

Kにも深い心の傷があった。彼が励ます会の代表を務める大学三年のとき、遺児のクリスマス会からの帰路のバス停に居眠りダンブが飛び込み、仲間の保育専門学校生徒二人が即死した。二〇歳の命だった。純粹で、責任感の強いKは、まるで自分が殺したように己れを責めた。死んだ女生徒の兄さんが慰めた。「妹は、日記に、遺児の作文を読んだ感動を綴り、こんな悲しい子をつくってはいけないといつも言っていました。その妹が車に殺されるなんて、口惜しくてなりません。でも今はせめて生き残ったあなたが、一生懸命頑張つて妹の悲願をとげてやって下さい」。そして、Kは卒業して育英会に入局する。

M子は高校時代に米国に一年留学し、帰つて外大で英語を学ぶことになる。M子は、遺児高校生の指導や募金など育英会の運動に積極的にかかわることになるが、Kと直接話すこともなく、一教師として遠くから好感をもつてみているだけで、三年生になる。つどいで初めて二人は話す。あくまで指導の打ち合わせていどで、特別の感情が動いたとは二人は意識しない。

Kが勤める学生寮「心塾」に、M子の弟が入塾していた。Kは雑談で、学生時代読んだM子の詩に感動したこと、育英会活動で頑張るM子を賛美する。弟は帰省したとき、その話を母と姉にする。そこでどんな話の花が咲いたか、弟がキューピッド役をつとめることになり、話はトントんと決まり、結婚ということになる。

「出会いはい妙」である。KとM子がどこに魅かれて愛し合うようになったかは聞かなかったが、読者がお考えになるように私も、作文との出会い、忌わしい二つの交通事故、それがつくつた二人の心の傷あとが、純粹で心やさしい二人の魂を呼び寄せたのであらう。

私が交通評論の道に入り、交通遺児育英会をつくる役まわりをする動機は、母の交通事故に「出会い」、交通遺児救済運動の提唱者岡嶋信治青年に出会ったからにほかならない。育英会は五年間に二万六千人の交通遺児を高校や大学に進学させたが、その間に励ます会のボランティア・育英会職員・大学自動車部員・交通遺児のあいだに幾千、幾万という出会いが生まれた。多くの遺児が励まされ立ち直った。たくさんのカップルが生まれた。人生の進路を変えて遺児たちと共に生きている人もいる（本書二四四頁「あしながおじさん物語」参照）。

これらの出会いを「陽」の出会いとすれば、いますばらしい「陰」の出会いが大輪の花を咲かせている。陰というと暗いイメージだが、まったくそうではない。教育里親「あしながおじさん」の「陰徳」の行為が、多くの交通遺児の心に愛の灯をともし、遺児たちに素直に感謝する心と呼び戻した。あしながおじさんは、育英会の遺児高校生たちを教育養子にして、三年間そつと奨学金を贈り続ける制度である。養子縁組といっても相手を特定せず、どこかの誰かがどこかの誰かに、むろん見返りを期待せずに送金する、まさに陰徳である。

父の事故死という子どもには背負いきれない重い十字架を背負いながら、親戚に蹴られ、近所の人びとや友だちに白い目でみられ、すっかりいじけ、すねていた遺児たちは、あしながおじさんがお金持でなく、同じ不幸や貧乏の体験をもつ庶民からの、見返りを期待しない「無償の愛」だからこそ、何の疑いもなく信じられた。遺児たちは素直に感謝する。人の心の醜さを知っているだけに、かえって愛を知った彼らの心は雪のように真白で、清流のように澄んでいた。遺児た

ちは、名も告げないあしながおじさんに年賀状や暑中見舞や自分史物語を書き、育英会が取りつぐ。あしながおじさんからの便りは、育英会の機関紙に載せる、という格好で不特定多数間の文通が続く。遺児たちの心はますます浄化されていく。

昭和五七年夏、遺児高校生たちは話し合った。この感謝の思いを行動に体现できないか。こうして「ありがたい、あしながおじさん！ 恩返し献血運動」が、全国一斉に行なわれ、一日で一万人の献血成果をあげる。翌年、第二弾として「災害募金」を街頭で行ない、二千二百万円を北炭夕張・秋田地震・三宅島噴火・島根水害・長崎水害の被災者に贈る。

遺児たちは考えた。災害が起これば災害遺児が生まれるはず。彼らは僕らよりきつと貧しい。高校へも進学できないのでは……。若者の信条は即行動だ。熊本で、災害遺児育英募金が起ころ。三井三池有明鉱の爆発が起これと全九州の交通遺児が立って七四一万円を、長野地震には六五三万円を送る。あしながおじさんへの感謝のエネルギーは日を追って大きくふくれあがっていく。そして五九年夏、恩返し第三弾として、全国の街頭で「災害遺児にも高校進学の夢を！」の訴えが聞かれ、千二百万円がプールされた。

愛が人間をこれほどまでに変えうるものなのか。あしながおじさんが愛を贈り、その愛を受けた交通遺児が身のまわりの弱者のことを考え、災害遺児にその愛の松明^{たいまつ}を伝え、愛の輪を広げている。陰徳が咲かせた大輪のバラといえる。

ミーイズム（自己中心主義）の時代というが、その日本で無数の庶民と若いボランティアと交通遺児たちの心のふれあいがつくりだした、壮大な人間ドラマ「あしながおじさん物語」である。

遺児は、あしながおじさんに手紙を書く。父の死と思い出、母の苦勞、母への感謝、私の性格、高校生活、夢、志望の職業、宝物、あしながおじさんへの感謝、献血と募金の体験などを集めて、1部「あしながおじさん、ありがとう」とした。悲嘆から出発して、遺児たちは明るく、たくましく成長している。人間って、すばらしい。

2部は、一人のあしながおじさんのヒューマン・ストーリーを、筑波大学の副田義也教授（まきた ぎや）グループと交通遺児大学生がお話をうかがい、まとめたものである。淡々と語られる自分史や参加動機に人間のぬくもりを感じる。人間って、本当にすばらしい。

また、あしながおじさんの人間像を探り、恩返し献血で遺児が何を得たかを副田グループに学問的に調査してもらった結果を発表している。あしながおじさんへの参加動機は感動の連続だが、それはまたすぐれた日本人論である。遺児たちは感謝し、恩返しに献血をするが、愛を受ける立場が愛を広げ伝える立場になったとたん生きいきと活動する姿に、教育に何か必要かを考えさせてくれる。

あしながおじさんが運動に参加して得たものは、「与えたもの」より大きかったというが、遺児と相互媒介的に成長する過程は、この運動の副産物としてはあまりにも大きく、感動を禁じえない。

あしながおじさん運動は、単に遺児を進学させ励ますというにとどまらず、双方が開眼し、自己成長をとげると同時に、社会への働きかけが活発になり、一種の世直し運動になっている側面を発見した。人間って、何とすばらしいんだろうか。

3部は、交通遺児家庭の実態と交通遺児救済の歴史を書いた。遺児家庭は依然貧しく、一般家庭との格差は開く一方で、善意の運動だけでは救済の完結はないことを示唆している。救済の歴史をふりかえると、あしながおじさんは教育里親「あしながおじさん」だけでなく、さまざまな「あしながおじさん」がその時どきに形を変えながら遺児を支援して下さったことが、つくづくわかるのである。日本人の過半数が壮大な人間ドラマ「あしながおじさん物語」の主役だったのではないか、と思うくらいである。日本人って、すばらしい。

運動の当事者がいうのは変だが、あしながおじさん運動は参加することに意義があるのではないか。参加者がふえることで、日本の社会はよくなり、日本人は光輝くような気がする。

この本を読んで感動されたら、どうぞあなたも参加してください。あしながさんとまではいかなくとも月千円をお贈りくださる、愛称「短足おばさん」としてでも、どうかこの子らを励ましてやってください。

(一九八五年三月)

玉井義臣

目
次

あ
し
な
が
お
じ
さ
ん
物
語

出会いが道を拓く——編者まえがき

Ⅰ部 あしながおじさん、ありがとう

1 負けでいらんに！……………(9編) …… 3

2 心の写真……………(10編) …… 25

3 体には父の血が流れる……………(9編) …… 47

4 金では買えない宝物……………(9編) …… 69

5 私のあしながおじさん……………(9編) …… 93

Ⅱ部 あしながおじさんの声

1 苦しみをバネに——声(1)……………(5編) …… 119

2 私も頑張らなくては——声(2)……………(6編)……………149

3 あしながおじさんと遺児たち

1 あしながおじさんの人間像……………副田義也……………190

2 あしながおじさんの収穫……………藤村正之……………216

3 献血運動で得たもの……………樽川典子……………228

3部 より広く、より深い運動へ

1 交通遺児家庭の生活危機……………副田義也……………237

2 あしながおじさん物語……………玉井義臣……………244

——交通遺児救済運動のあゆみ

「あしながおじさん」になっていただく人のために
奨学金を利用する人のために
育成金を利用する人のために

Ⅰ
部

あしながおじさん、ありがとう

負け
て
い
ら
ん
に
!

1——負けでいらんに！

高橋 靖子

一番悲しかったとき、私は「悲しい」と言いませんでした。昭和四八年二月二三日、とても悲しい日になりました。「お茶いっぶぐ飲んでんげ」と祖母が言いました。「急いでっからいらね」と言って、出かけた父。そのわずか数分後に父は逝ってしまいました。

遮断機のない踏切で列車と衝突し、そのうえ、父だけが列車に何メートルもひきずられました。内臓は破裂し、肋骨や頭蓋骨はもう碎けていました。そして、真白い雪の上には、父の流した真赤な血が残りました。

変わり果てた父。頭と体には白い包帯がまかれ、目、鼻、口には脱脂綿が入れられていました。青白くとてもつめたかった父が、こわいときえ思いました。

それから二週間が過ぎた頃、私は普通に歩けないことに気付きました。病院に行って見てもらいましたが、病名はわかりませんでした。ただはつきりわかったことは、原因はやっぱり父の死